



龍族

नागा लोक

3

南天会
平成27年
3月30日

佐々井上人高野山講演

この度佐々井上人は、6月に日本に一時帰国され高野山大学にて講演会を行うことになりました。

和歌山県とインド・マハラシュトラー州は一昨年10月、観光交流や企業間協力のための覚書を交わし、アジャンタ、エローラ、そして高野山という仏教に関係する世界遺産を持つ両自治体の友好の証しとして、インド側からアンベードカル博士の銅像を高野山に贈りたいとの申し出がありました。高野山ではこれに応え、山内の高野山大学構内に銅像を設置することに決定し、本年の開創1200年に合わせて除幕式を予定してまいりました。

昨年7月、このことをインドの新聞で知った佐々井上人は、南天会事務局に事実関係を問合せ、来年可能であれば日本に帰国してその除幕式に参加したいと言われました。ところがその直後佐々井上人の体調が悪化し、既知のご

とく大変な状況になり、一旦このことは先行きが見通せなくなりましたが、奇跡の復活を遂げられ体調も徐々に戻り、日本帰国が適う状況まで回復されました。

南天会事務局として、このアンベードカル博士銅像建立を、佐々井上人とインド仏教、日本仏教、さらには世界の仏教徒にとっても重要な機会と捉え、アンベードカル博士の後継者と目される佐々井上人に講演をしていただくよう準備してまいりました。幸い高野山大学も共催に応じていただき、800人収容の大講堂黎明館をその会場として、本年6月14日(日)、午前午後と二部に分けて「佐々井秀嶺高野山講演」



を開催する運びとなったわけ

す。第一部の「アンベードカル博士と現代インドの仏教徒」では、本年一月に関西学院大学の関根康正教授の発案により発足した「B・R・アンベードカル及びエングエイジド・ブツデイズム研究会」にご協力いただき、佐々井上人の講演に合わせて現代インド仏教徒研究の報告をしていただきま

す。さらに第二部「私観南天鉄塔」

では、佐々井上人の大テーマ南天鉄塔及び龍樹菩薩について、在インド五〇年に渡るご自身の研究調査の一端をお話しいただきます。この講演に関して、現在佐々井上人説の口述筆記本を発行すべく準備いたしております。南天会の皆様には、あらためて各詳細をご案内いたします。

アンベードカル博士銅像建立奉賛

佐々井秀嶺高野山講演

日時：6月14日(日)

場所：高野山大学黎明館(和歌山県伊都郡高野町高野山385)

9:30 アンベードカル博士像へ献花 五戒文読経

10:00 第一部「アンベードカル博士と現代インドの仏教徒」

佐々井秀嶺

B・R・アンベードカル及びエングエイジド・ブツデイズム研究会

関根康正(関西学院大学教授) 志賀浄邦(京都産業大学准教授)

鈴木晋介(茨城キリスト教大学助教) 根本達(筑波大学助教)

12:00 休憩 昼食

13:00 第二部「私観南天鉄塔」

佐々井秀嶺

近藤堯寛(高野山櫻池院住職)

宮本光研(岡山長泉寺前住職 南天会賛同人)

中村晃朗(インド国立ナランダ大学大学院研究生)

15:00 検討会 交流会 16:30 終了

主催：高野山大学 南天会

後援：高野山金剛峰寺国際局(依頼中) 東方出版

アンベードカル博士国際教育協会日本支部(B.A.I.A.E.Japan)

佐々井上人を訪ねて
ドンガルカル仏教徒大会参列
インド・ナグプールと大菩薩峠
アンベードカル菩薩の故地を巡る旅

南天会主催でインド旅行に行つてまいりました。南天会事務局佐伯を含め9名の人が参加しました。以下、旅行記です。

※

2月4日デリーに到着した南天龍宮城参拝団一行は、翌朝飛行機でチャティスガル州の州都ライプールへ向かった。空港では佐々井上人がにこやかに我々を迎えて下さり、昨夏の危機の片鱗も見せないお元氣な姿そして声に、歓喜を越えて涙ぐむ人もひとりふたり。各人を紹介すると一人ずつに「よく来ましたね。」と声をかけられ、温かい時間が流れた。早速今日は、佐々井上人発見の大遺跡シルプールを見学ということ、それぞれ車に分乗した。見るとバンテージ(佐々井上人)の車が最新のトヨタ車になっている。昨年の病氣回復後、篤志家の人が寄贈したのだそうだ。フロントガラスには「ARYANANTAGARJUN」の文字、バンパー

にはためく仏旗は同じく、我々旅行団の先頭を疾駆する。(佛国土をつくろう会から寄贈されたジープもちろん健在である)



シルプールは、ライプールから東に50km、マハーナディ河南岸にある古代都市遺跡。紀元4世紀ごろから10世紀にかけて、仏教寺院やヒンズー寺院などが混在する宗教都市として栄えた。紀元6世紀に玄奘三蔵が訪れた南橋薩羅国(ダクシナーコーサラ国)の都城とはここであると言われている。19世紀後半より様々な遺物、仏像等が出土して遺跡が認められおり、1954〜56年に本格的な発掘調査が行われたが、やがて資金難で放置される状態が長く続いていた。1990年代、シルプールを訪れた佐々井上人は、この遺跡の仏教的な重要性を認識し、仏教徒から資金を集め主

要な土地を購入して、インド考古学局のA・K・シャルマ氏に依頼して発掘を行った。2003年には、2メートルの仏陀坐像を安置する寺院跡を発見。発見者の佐々井上人の名を冠して「ササイ・ブツダ・ビハラ」と名付けられた(現在は南コーサラ国の王の名をとってテイーヴァラデーヴァ・ブツダ・ビハラと改称されている)。一帯から僧坊跡、巨大な市場の跡、複数の寺院など次々と遺跡が見つかり、ナールンダ仏教大学の規模をしのぐ一大仏教都市が確認された。

M・P州から分離独立したばかりのチャティスガル州にとっては、



州都ライプール近郊に出現したこの大遺跡をまたとない観光資源ととらえ、大きな道路を通し周辺が整備された。しかし、州政府第一党のインド人民党(BJP)はヒンズー至上主義の立場から、シルプール遺跡をヒンズー遺跡と位置付け仏教徒の意向を無視した発掘調査を行った。発掘主任のシャルマ氏もそれに追従し、佐々井上人と意見の相違を見ている。

現地の仏教徒協会は、仏教遺跡としての正当な調査が行われるよう、所有する土地にお寺(アーリヤナーガールジュナ・シュレイ・ササイ・ブツダ・ビハラ)を建立し、様々な働きかけをしている。現在このお寺に、日本から曹洞宗の平野文興師が止住されている。我々は平野さん手製の昼食をいただき、バンテージの案内で、広大な遺跡各所を回った。

翌朝早くライプールから西へ、世界仏教徒大会が開催されるドンガルカル市を目指す。

ドンガルカルは鉄道の石炭中継基地としてナグプールの仏教徒が大勢移住した町で、駅の南側



に仏教徒街を形成している。また周辺にいくつかの丘があり、それぞれヒンズー教、ジャイナ教の聖地として有名な場所でもある。仏教徒も南郊外のプラジュニヤ・ギリ（般若山）に黄金の大仏を建立して、毎年2月6日に仏教徒大会を開催する。佐々井上人は、毎年主賓として参加し、スリランカやタイ、ネパールなどからも僧侶方が出席する。日本人はバンテージーのおかげで賓客扱いである。仏教徒の家で昼食の接待をいただき、中心地のナグセーナ・ブツダ・ビハーラ（龍軍寺）から般若山までおよそ3キロを行進した。

出会う人々みな「ジャイビーム！」。にぎやかな鼓笛隊の音楽に、爆竹の轟音が鳴り響き、青と白を基調としたダンマ・セーナ（法軍）の制服を着た人々が、心も顔も晴れやかに僧侶の後に続いていく。そのまわりを笑顔の人々を取り巻いて、子どもたちのはしゃいでいる。般若山に近づくにつれ人の数は増え3万人（主催者発表）。私たち一行もともに歩いた。私（佐伯）と、もう一人の僧侶の登嶋さんは、ほら貝を吹いて先導し、山上の大仏にお参りした後、麓に設けられた大天幕で式典が催された。

2月とはいえ30度を超える炎天下、意味の解らないヒンディ語を延々と聴く。いつもこの日は体力的にハードな日となるが、今年は巨大な扇風機が設えられ、バンテージーへの気遣いもあって、楽に感じられた（と思ったのは私だけか？）。途中、州首相が厳重警備の中会場に現れ、演説をおこなった。佐々井上人の雄叫びのような五戒文がスピーカーから大音声となつて平原に響く。しかし首相以下政府関係者はBJP党员だからか、

会場全体で唱えた「ジャイビーム！」にも沈黙していた。ビームラーオ・アンベードカル博士は、インドの宝なのだから仏教徒でなくとも呼応してもいいのに。

みんながみんなそうではないが、概して仏教徒は瘦身で身長も低いように思った。僧侶方も私よりみんな背が低い。それに対して、式典に参加した政府関係者、それを警備する警察官とも皆大柄で恰幅がいい。真っ白な上着を着て口ひげをたくわえた州首相を、バンテージーは見上げるようにしていた。ドンガルカルの仏教徒街は、地図で見ると駅の裏側に当たる。北側の町よりも住宅が密集し、経済状態も良くないのかもしれない。演説の合間に披露された歌や踊りの中で、何か地元の羊飼いの悲しみを演じる不思議な演目があった。私の勝手な解釈だが、



それは地主にむりやり羊を奪われるシーンを再現した悲話だったのではないか。バンテージーに聞いても「私もよくわからん」と言われたが、歌手の男性の頬には涙が流れ、真剣に聞き入っていた人々も泣いていた。1956年にアンベードカル博士と共に改宗した人々の50年、そして抑圧され続けた4000年。その重みを努力を積み上げることによって、まさに今克服しようとしているインドの仏教徒。笑顔の奥にある真剣さを感じた気がした。

結局バンテージーは、最初から最後まで大会の主役として常の人々の中心にいた。銃口に守られながら早々と会場を立ち去った州首相とは対照的に、たくさんの人々のあいさつを受け、祝福を求める人々、テレビや新聞社の取材

にもみくちやにされながら、何とか会場を脱出し、我々が夕食を済ませると同時に(バンテージは食べられなかった)、ナグプールへ出発した。今朝からの移動距離は500キロ。80歳、常人のなせる業ではない。暗闇の中、我々を乗せた車は国道6号線を西行し、夜遅く仏都ナグプールへ入った。

おそらく旅行社の策略か、ナグプールで我々が泊ったホテルは五つ星のデラックスで、昨日のドングルカルの喧騒とは別世界、バンテージも立ち入ろうとしない天人境であった。時差と移動疲れを回復するため今日は遅めの出発ということで優雅なるひと時を過ごしていると、約束の時間通りにバンテージ号の仏旗が見えた。今日はマンセルへ、南天鉄塔に参拝する。

シルプールから、中村龍海さんという研究者がバンテージに同行していた。彼は800年ぶりに再興されたインド国立ナーラダ大学の第1期留学生で、昨年末にナグプールに来て、佐々井上人の南天鉄塔説を口述筆記した

という。同じ車に同乗して親しく話をしてみると、驚くほど博学であった。南天鉄塔に関する基本資料を踏まえ、サンスクリット文献、英語資料にも通じ、そして何よりも佐々井上人の思想に密着しようとする姿勢が感じ取られた。本来ならば、我々仏教者がやるべき作業を突如現れた若い研究者が、意志をもって遂行している。ありがたい思いと、うらやましい思い半々。バンテージも中村さんの文章を確認し、「これを読んだらお宅も驚くぞ!」「真言宗ならば高野山であろうと、何派であろうと、また曹洞宗であろうと何宗で



であろうと、先ずは読んでみてください。反論はその後で受け付けます。」という絶大な評価であった。(本年6月14日、高野山大学にて佐々井上人の講演会を企画しています。その時までにはこの本を発行すべく準備中です。)

マンセルとはマンジュシユリ(即ち文殊菩薩の事である。龍猛(龍樹)菩薩がたどり着いた南天鉄塔の中では、文殊、普賢を上首とした諸々の大菩薩が大日如来の自受の説法に浴していたという。本地の仏名を「龍種上尊王仏」という文殊菩薩は、龍種族の尊者であった。文殊菩薩とは誰か? 竜樹菩薩とは誰か? 南天鉄塔とは如何なることなのか?)

南天龍宮城に住すること50年、アーリヤナーガールジュナ佐々井秀嶺尊者は昨夏、命の瀬戸際から復活し、いよいよ自身中の鉄塔を開展して、混迷の世に生きる人々に未来の道を指し示す一切の法蔵を誦出する。その日は近い。南天会諸氏、心してその受明者とならん!

・・・、つい大仰な文章となつてしまいました。
マンセルには、古い湖の周辺に

古代の遺跡が点在している。その中でも、南岸の巨大なビハール跡と南天鉄塔遺跡と目される伏鉢状の丘が代表的な遺跡で、佐々井上人が発見し、土地を取得して龍樹菩薩記念研究協会を設立し発掘調査をおこなった。とくに南天鉄塔遺跡は、岩山の頂上部を複雑なレンガ構造で覆い、その内部に降りてゆく洞窟もある。佐々井上



人が最も重要視する遺跡である。しかしここもシルプール同様政治的宗教的な事情に振り回され、いまだ総合的な発掘研究に至っていない。

マンセルから東へ7キロのラムテク地区に龍樹連峰と呼ばれる丘陵が連なっている。西端の最も高い岩山にはヒンズー教のラーマ寺院が建っている。ここを龍の頭頂部として腹部にあたる山脈の中央に洞窟があり、その上に龍樹寺という小さなお寺があるが、現在はヒンズー寺院となっている。佐々井上人は2010年、この麓に龍樹菩薩大寺という大きなお寺を建立した。境内にはラージギルの多宝山上でバンテージーの枕元に現れた龍樹大菩薩の巨大な石像が立つ。台座にはその時の霊告が記され、石像上部には南天龍宮城をめざした平家の象徴である平家納経箱蓋の文様が並んでいる。マンセルや龍樹菩薩大寺の様々な構築物は、佐々井上人の思想を反映した立体曼荼羅と言える。それぞれ重要なメッセージを持ち、今後その実証をするべき者へ向けた遺戒でもある。「さあ私はここで休んでいるか



からお宅らあの山へ登ってきなさい。」と促され、龍樹菩薩大寺の正面の龍樹山へ登ってみることになった。お寺の山門（建設中）を出て、道をわたり灌木の中を山裾まで行くと、ピクニック中の学生たちから大歓声を浴び、白大理石の階段を上っていくと、中腹の龍樹寺に到着。中を覗くと洞窟らしき穴は埋められているようだった。番人のような人がいて中には入れず、お寺を出てさらに頂上を目指した。振り返ると地平のかすむ大平原の中に龍樹菩薩大寺が小さく見えた。そして頂上をを越えるとその向こうに大きな湖が広がっていた。麓からは想像もつかない風景である。まるで湖から現れた大龍の背中に乗っている気分であった。



翌8日は佐々井上人の住坊インドラ寺を訪問した。ナグプール北郊のインドラ地区は、インド仏教の最前線ともいえるべき地点で、

その中心に佐々井上人の住まうインドラ・ブツダ・ビハラーがある。我々はこちらでも歓待を受ける。インドラ寺協会長のアミット氏の案内で、事務室、図書室（アンベードカル博士の全集が揃う）インターネット室、建設中の女性専用の宿泊所などを見て回り、3階のバンテージーの部屋にお邪魔した。今でもバンテージーに会おうと思えば、インドラ寺を訪ね本堂横の階段を上がつて3階廊下を少し歩けば、そこに佐々井上人はおられる。（留守も多いが・・・）バンテージーと町の人々の間に壁はない。バンテージーの姿を見ると、笑顔で近づいてきてその足に触れ、合掌して「ジャイブーム」。話途中のバンテージーもそれに応える。子供がいれば話しかけて頭をなでる。この近さが佐々井上人の姿である。

インドラから少し離れた別の通りのヤシヨダラ・ブツダ・ビハラーという小



さなお寺で、仏教婦人会のお接待を受けた。このお寺の本尊仏は、昨年のバンテージの危機の後、回復を祝ってタイの仏教徒から贈られた仏像ということであった。本尊様と外にあるアンベードカル博士の像に献花して、バンテージの「パグワン・ブツダ・キー・ジャイ!」「ボーデイサトバ・ババサーへブ・アンベードカル・キー・ジャイ!」の掛け声に唱和する。8畳間ほどの空間に、バンテ・ササイ・ジート日本の仏教徒にお布施をしようと町中の人々が入れ代わり立ち代わり入ってくる。花びらを手渡され「ジャイビーム」オレンジを手渡され「ジャイビーム」さらにはお金を供養され「ジャイビーム」。大勢の人と一緒

に写真に納まり、人々との交歓の間は終わらない。供養される方も大変であった。

午後からは、現代インド仏教徒



の聖地、デイクシャ・ブーミ（改宗広場）を参拝した。2000年に建設された改宗ドームの中に入り、佐々井上人がムンバイより招来したアンベードカル博士の真舍利が納められたストウーパを礼した。そのあと特別に2階のドーム内に入れてもらった。ドームの中心に立って声を出すと頭頂から反響が下りてくるように響き、真つ白なドーム全体にこだまする不思議な空間であった。



やはりバンテージの体調は万全ではなく、午前中の行事や連日の移動でお疲れが出たよう、午後のお話し会は中止となり、我々はバンテージとお別れし、ホテルに帰って寝台列車の出発時間までのんびり過ごすことになった。

ナグプールは人口250万人

を数える大都市で、インドの中央に位置し市内にインドの中心を示す石碑がある。アンベードカル博士の説によると、市内西部のアンバザリ湖から流れ出るナググという小川がナグプールの名の由来となつていっている。市内の大小の湖は、周辺からの流れ込みではなく、地下からの湧水によるものだという。マンセルの湖も地下からこんこんと湧き出る水によつて何千年も干上がらないのだとバンテージの説明にあつた。

巻頭言でお知らせしたように、本年六月に佐々井上人は一時帰国して高野山に於いて講演をされることになった。その高野山は、今年開創一二〇〇年を迎え4月から5月にかけて山内で様々な法要や催しが行われる。この開創1200年という年限の基準となつたのが、弘法大師の上表文「紀伊国伊都郡高野の峯において入定の処を請け乞うの表」（弘仁7年816年）である。この上表文には、真言行人の修禅の適地として大日経具縁品の記述に従い深山の平地で、泉湧き出る高野山を択んだとある。その大日経の

所説には「行者悲念の心をして、当に為に平地を択ぶべし、山林に華果多く、悦意の諸の清泉は諸仏の称嘆したもう所なり、応に円壇の事を作すべし」となっている。

ひるがえつてナグプールは、デカン高原中央部標高300メートルの台地に広がる大平野で、地下からの湧水が絶えず、オレンジシティの異名のごとく果樹が豊富で、古代にはアルジュナという名の大木が生い茂っていたと聞く。つまり高野山はナグプールの縮小日本版だと言えなくもない。そしてその中心には、かの南天鉄塔をイメージした根本大塔が聳え建つ。アンベードカル博士の銅像が高野山に建立されることは、唐突なようで実は非常に象徴的なことなのだ。

時間があるので、希望者だけ市内の動物園とフタラ湖というナグプールの市民の憩いの湖を訪問。夕



食後、アンベードカル博士の肖像画が正面に掲げられたナグプール駅に移動。ナーシク行の寝台特急が停まるホームに着くと、バンテージーがわざわざ見送りに来られていた。お疲れが出てはと、見送りはお断りしていたが、少し元気になられたようで、何回も皆さんと写真を撮り握手をして列車が発するまでずっとホームに立っておられた。

寝台列車は暗闇のデカン平原を疾走し、翌朝古都ナーシクに着いた。ナーシクは人口100万人、インド2大叙事詩「ラーマヤナ」の舞台として有名で、バラナシと並ぶヒンズー教の2大聖地である。紀元前後のサータヴァーハナ朝のころには仏教都市として栄え、市郊外には大規模な石窟寺院が残っている。ナーシク最大のヒンズー寺院カーラーラム寺は、アンベードカル博士が不可触民のヒンズー寺院立ち入り運動を展開したサツティヤードグラーハの舞台でもある。

ナーシクもゆっくりと回って見たかったけれど、我々は大型バスに乗り込んで市内を後にし、一路ジュンナルを目指した。南にま

つすぐ伸びる国道は道幅が狭く、のろのろと進むトラックなどの後ろから、対向車をぎりぎりかわしながら追い抜くので快調というわけにはいかず、予定時間を浪費していった。横に並走して新しい道路の工事をしていたので、次回行くときにはスムーズに移動できるかもしれない。

ドライブインで昼食後、西ガーツ山脈の断崖に取り付き、うねるような道の峠を越えると、岩山に囲まれたアルプスの小都市のようなジュンナル盆地に入った。ジュンナルはデカントラップの高原都市として数千年の歴史を持つ古都で、豊富な水と緑の多い肥沃な土地で豊かな農作物に恵まれ、古来有力な王族が支配してきた。近代ではマラータ王国の英雄チャトラパティ・シヴァージーの出身地として有名である。市街地を取り囲むようにそびえるテール状の岩山の中腹にサータヴァーハナ朝のころに開鑿された多数の仏教石窟がある。

「今日のメインです。」と言って、ガイドのジェインさんが案内してくれたジュンナル石窟は、見上げるような石段を登らなくては



ならなかった。標高700メートルの麓からさらに1000メートル上がり、およそ2000年前のチャイティヤ窟とビハール窟に参拝。かなり大規模な遺跡だが、外国人観光客は我々だけである。

ここもすごいけれど、今日のメインは決してここではない。この後、今回旅行のタイトルにもなっている佐々井上人心の絶景、大菩薩峠ナンナガートへ向かう。去年の経験からして、もう時間が無い！運転手さん、急いでくれ！ナンナガートとは、デカン高原の西の大断崖で、蛇の頭のように

盛り上がった山裾に一本の古い石畳の道が700メートル下のムンバイ平野に向かって蛇のごとくにうねりながら降りていく、その周辺にはナーガ文字を記した洞窟や仏陀の立像そっくりの岩山などが見える、まさしく天下の絶景である。この地を佐々井上人は自らの発心の機縁となった甲州大菩薩峠と呼んでいる。ここに1エーカーほど土地を買って、茶店を開いて道行く人にお団子を売るのが夢だ、と言っておられた。

長い長いバスでの移動の末に、我々はずいぶん大菩薩峠にたどり着いた。登嶋さんのほら貝が響き、みんなで拳を上げて「ジャイブーム！」と勝どきを上げた。我々は何に勝ったのか？

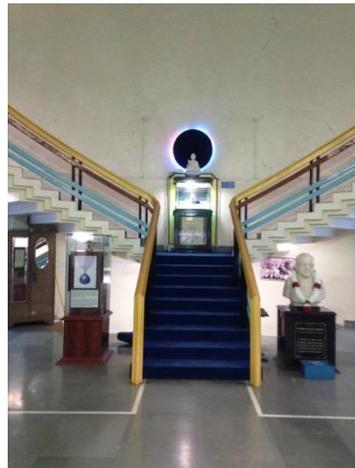


達成感に包まれつつ日が陰り始めたナンナガートを後にして、南へ、本日の宿泊地プネーを目指した。大都市プネーは渋滞ひどく、ホテル到着は夜の十一時を過ぎていた。皆様、大変お疲れ様でした。

翌2月10日、プネー。一九三二年、ロンドンで行われた第二回円卓会議の後、不可触民の分離選挙を求めたアンベードカルに対し、ヒンズー社会の崩壊を恐れたガンジーは当時囚われていたプネーのイエラワダ監獄で断食を執行し、分離選挙に強硬に反対した。国民の父と尊敬されていたガンジーが死を賭して不可触民制を守ろうとする矛盾に、アンベードカル博士は、ついにその信念を通すことができなくなり、分離選挙ではなく議席数を確保する保留議席制度を採用することに妥協した(プーナ協定)。

ガンジーが断食を行ったイエラワダ監獄の壁を車窓から眺め、その後、どういう趣向かオートリキシヤに分乗してプネーの町を走り回り、市内山の手のアンベードカル記念博物館へ到着した。

青いタイル張りのストウーパ形が印象的なこの博物館は、博士の生誕一〇〇周年を記念して一九九〇年に建設された。ここにはムンバイの自宅で毎日祈りを捧げたブツダ像や、博士の遺灰を収めた壺、インド憲法を書き上げた机など数々の所有物や調度品、一九九〇年に南アフリカのネルソン・マンデラ大統領と共に授与されたインドの国民栄誉賞バーラト・ラトナ(インドの宝)などが展示されている。

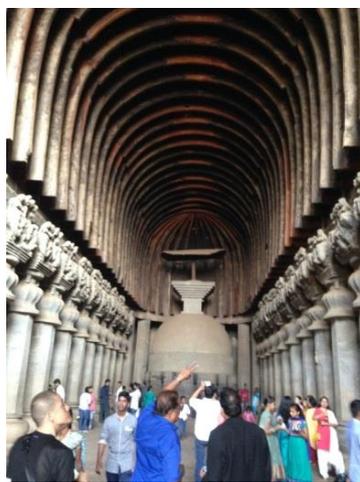


このミュージアムショップで、私はアンベードカル博士と仏陀の印刷されたマグカップを購入して得意になった。(しかも取っ手が上下逆に取り付けられたレアもの!)
きれいに掃



除されてとても雰囲気良く、アンベードカル博士に対する尊敬が表れた博物館であった。

プネーを後にした我々参拝団は、インド最大のチャイティヤ窟を有するカルラー石窟に立ち寄った。岩盤を掘りぬいて巨大なアショーカ王柱を刻み、その奥に広がる洞窟には、並んだ石柱の奥にきれいな半球形のストウーパが白く浮き上がって見える。天井にはアーチ形に削った木製の梁が据えつけられ、ストウーパ上の傘蓋も木で作られていた。一八〇〇年前の木材だという。



しかしこの壮大な石窟寺院の真ん前に、入り口をふさぐようにエクヴィラ・デーヴィ・テンプルというヒンズー寺院が建てられている。カルラー石窟から現れたという女神のために毎年大量の

羊や鳥の供犠が行われる。地元の人々の信仰であるが、何か穏やかならぬ雰囲気を感じた。

昼食後、ハイウェイを飛ばしてムンバイへ向かった。前日の渋滞の愚を繰り返さぬように、早めの到着を目指す。高原都市プネーからムンバイの平野へ西ガーツ山脈の景色を眺めながら下りていく。人口2000万のムンバイは南北に長い半島のような都市で、人々がみんなその先端を目指すので、恐ろしい大渋滞が発生する。去年はムンバイ市内に入ってからホテルに到着するまで3時間以上かかってしまった。思えば、シルプールから西へ西へ移動して、ついにムンバイまで到達した。ほぼインド横断の旅である。

最終日、アラビア海を望むアンベードカル博士の茶毘所、チャイティヤ・ブーミに参拝した。巨大なトールナー(鳥居の原型ともいわれる仏教建築の門)を通って海沿いを進むと、淡いピンク色をしたストウーパが見えた。中にはアンベードカル博士の写真が展示してあり、我々は裸足になつて参拝した。番をしているお坊さんに、日本から来たことを継げると、4

月14日の
 生誕祭と1
 2月6日の
 涅槃会以外
 は入れない
 2階内部の
 ストウパー
 を特別に拝
 ませてくれ
 た。「バンテ・ササイ・ジーをご
 存知ですか？」と聞くと、「もち
 ろん知っている。去年の夏にムン
 バイの病院へ入院されていた時
 にはお見舞いに行った。」



アンベードカル菩薩の真舍利
 を前に舍利礼を唱え、土産物屋で
 アンベードカル像やバッジなど
 を購入。インド中に銅像が建てら
 れる大偉人の茶毘塚であるが、む
 しろひっそりとして、ヤシの木陰
 からアラビア海を望んでいる。ア
 ラビア海は靄にかすんで、その先
 にある世界を隠す。アンベードカ
 ルの前にも後ろにも、多くの人々
 が歩いていて。我々が8日間駆け
 足で移動したこの大菩薩ロード
 を、今も着実に歩み続ける佐々井
 上人とインド仏教徒。日本にあつ
 てもこの道の同行でありたいも
 のだ。

かくして「佐々井上人を訪ねて
 ドンガルカル仏教徒大会参列・イ
 ンド・ナグプールと大菩薩峠・ア
 ンベードカル菩薩の故地を巡る
 旅」は大団円を迎えた。この間、
 諸仏菩薩諸天善神に守られて、大
 きな事故もなく無事行程を終え
 ることができた。
 南無本師釈迦牟尼仏
 南無妙法蓮華經
 南無阿弥陀仏
 南無大日如来
 南無龍樹菩薩
 南無文殊師利菩薩
 南無アンベードカル大菩薩



佐々井上人最新刊発売！

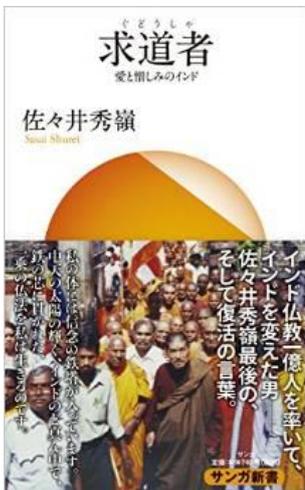
『求道者』愛と憎しみのインド

サンガ新書から佐々井上人の本
 が刊行されました。この本は、ナ
 グプールインドラ寺の住坊を訪
 ねて、佐々井上人の語りだす物語
 をじっくりと聞くような、そんな
 気にさせてくれる本です。見知ら
 ぬナグプールの路上に立つて、イ
 ンド仏教徒の人たちとこれから
 生きていこうとする佐々井上人。
 身の回りで起こる様々な日常を
 智慧と勇氣と求道心で乗り越え
 ていく佐々井上人。そして共に歩
 むインドの人びと。今夏の危篤騒
 動にまで言及したバンテジー
 最新刊の、そして復活の言葉。佐々
 井ファン必携の書です。

編集協力…小林三旅

定価…740円＋税

※(株)サンガ社長島影透氏は南
 天会賛同人です。



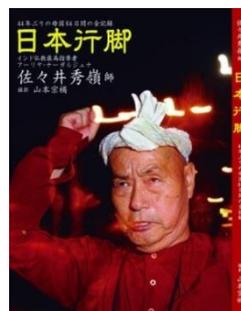
2009年帰国時の山本宗補氏
 撮影大型写真集

『日本行脚』44年ぶりの母国

64日間の全記録

(改定定価10000円＋税)

残部僅少ですが、佐々井秀嶺資料
 室にて販売しております。南天会
 事務局までお問い合わせくださ
 い。



ナグプール旅行企画・個人旅行手配
 お気軽にご連絡ください。



株式会社 **トラベル サライ**

大阪本社 フリーダイヤル 0120-408-128

〒541-0047 大阪府大阪市中央区淡路町 1-2-10

RRビル 3F

TEL: 06-6232-3012 FAX: 06-6232-3013

東京営業所 フリーダイヤル 0120-408-361

〒105-0013 東京都港区浜松町 1-12-5

アルファエイチビル 5F

TEL: 03-5777-6326 FAX: 03-5777-6327

南天会現況 (3月30日現在)

正式会員数 72名

賛同人 (50音順)

岩佐澄隆 (仏国土をつくろう会会長)

漆間宣隆 (浄土宗浄土院住職・前岡山

県佛教会会長)

奥平心月 (釣月庵庵主)

織田隆深 (高野山真言宗真成院住職・

密門会会長)

黒澤雄太 (剣士・日本武徳院師範)

小池一郎 (株式会社マクシス・シンター

常務取締役)

島影 透 (株式会社サンガ社長)

高山龍智 (佐々井上人お弟子)

富士玄峰 (臨済宗・元ナグプール同友

会世話人)

宮淵泰存 (日蓮宗妙光寺住職)

宮本光研 (真言宗御室派元執行)

宮本龍勝 (佐々井上人お弟子)

山本宗補 (フォトジャーナリスト)

※当会の主旨を理解し、協力、推薦する人を賛同人とし、お名前を公表させていただきます。賛同いただける方は是非お申し出ください。

※世話人について

南天会諸業務をお手伝いいただける方は皆世話人とし、特に任命等はいたしませんので、どなたでも気軽に参加ください。

第3回 南天会交流会を開催いたします (今回は岡山での開催です)

第3回 南天会交流会

日時：平成27年4月12日(日)

午後2時より

場所：長泉寺 (岡山市北区南方三

―10140 電話08

6122317450)

「南天会活動報告と佐々井上人

一時帰国に向けて」

・宮本光研師のお話

・南天会事務局報告

交流会参加無料、会員外の方もどうぞご参加ください。

午後5時終了後 懇親会(会費

3000円ほど 参加希望の

方は事務局までご一報下さい。)



南天会告知のお願い

事務局不如意のため、入会者数が未だ少ない状況です。是非周知の程よろしくお願ひいたします。パンフレット等必要な方は、事務局までお知らせください。(南天会ホームページの「南天会について」の一番下からパンフレットPDFがダウンロードできます) その他、ご提案等ございましたら是非ご連絡下さい。

会報『龍族』寄稿のお願い

当会々報は、年4回をめざして発行して参りたいと思ひます。会員それぞれの佐々井上人に対する思い、研究、インド訪問記など、是非ご寄稿下さい。原稿はメール、郵送等にてお送りください。皆様のお声を取り入れた誌面にしていきたいと思ひます。(原稿料等はお支払いいたしません)

龍尾言

田舎のお寺でパソコンに向かい、龍族の編集作業をしていると時間がぐるぐる過ぎてゆき、遅々として進まぬ文章に気が遠くなることがある。そのうち家の人にも(ありや何をやっつものか?)

と白い目で見られ(ているような気がして)、裏山に行つて木を伐る振りをしてみたり、石段の砂利を掃く振りをしてみたりと、忙しそうに振る舞つてみるが、その実何もやっていない。しかたなくついた溜息を吸い込み、またパソコンに向かう。その時！携帯が鳴つて画面には「佐々井上人」の文字。「そちらはどうなつておりますかー！」「はい！(インドではみんなここでハーバンテ！と応じる)なんとか進めております。」はるばるインドから、仏道前進の力が注入されるのであった。(佐伯隆快)

(南天会事務局) 

〒710-0004 岡山県倉敷市西坂 1582-1 一心念誦堂内

TEL/FAX 086-463-9391

佐伯隆快 (090-5304-8955)

小林三旅 (090-4538-2677)

南天会ホームページ www.nantenkai.org

メール nantenkai@gmail.com

佐々井秀嶺資料室フェイスブックページ

ご利用ください  